

# 『江東区の文化財』シリーズ 発売開始!!

江東区の文化財を網羅した『江東の文化財』シリーズの刊行を開始しました。今回は永代橋界限と砂町です。



**定 価**

各500円

**頒布場所**

区役所6階文化財係(11番窓口)

芭蕉記念館

深川江戸資料館

中川船番所資料館



A4判 永代橋界限編60頁 砂町編68頁 口絵カラー8頁 本文2色刷り

# 下町文化

NO. 241  
2008.4.28

発行  
江東区教育委員会  
生涯学習部生涯学習課  
〒135-8383  
江東区東陽4-11-28  
TEL(03)3647-9819  
<http://www.city.koto.lg.jp/>

- 『江東区の文化財』シリーズ発売開始!!
  - 平成19年度新指定・登録文化財の紹介
  - 平成19年度特別講演会講演録  
江東区の寺社建築
  - 第26回時雨忌全国俳句大会記念講演会講演録  
古池に蛙は飛びこまなかった
  - 平成20年度芭蕉記念館特別展  
雲英文庫に見る芭蕉・蕪村・一茶と新しい領域
- 文化財揭示板  
江東外見発見

現在、区内には登録文化財が1045件、このうち指定文化財が31件あります。いままで文化財係では『江東区の文化財』(有形文化財・有形民俗文化財編、史跡編、第三集)を刊行して紹介してきました。しかし、刊行から15年以上が経過し、その間に新たな文化財が指定・登録されました。そこで最新の情報を盛り込んだ新訂版『江東区の文化財』を刊行し、区民の皆さんをはじめ、多くの方々に江東区の文化財を知っていただきたいと思います。

新しい『江東区の文化財』シリーズは区内を8つのエリアにわけ、1年に2冊ずつ刊行します。平成20年3月刊行の『永代橋界限と砂町を皮切りに、深川発祥の地・清澄、深川寺町、富岡八幡宮・深川不動堂、木場、亀戸天神・香取神社、亀戸東部・大島の各編を順次刊行していきます(名称は仮、刊行順は未定です)。

この本では文化財を種別ではなく地域別にまとめ、簡単なエリアマップも載せましたので、史跡や文化財をめぐるのが非常に便利になりました。また、コラムや索引など、充実した内容となっています。すでに刊行されている『いついつ文化財まつり』とあわせれば、江東区の文化財博士になれること間違いなしです。是非お買い求め下さい!

# 平成19年度 新指定・登録文化財の紹介

江東区教育委員会は、文化財保護審議会（会長白石克己・山梨県立美術館館長）の答申を受け、平成19年度諮問分のうち、区文化財として新たに4件を指定、7件を登録、2名を認定し、2件を登録解除しました。この結果、登録文化財の総数は1045件、うち指定文化財は31件になりました。

## 指定文化財

### 【有形文化財（建造物）】

深川不動堂 本堂

富岡1-17-13 深川不動堂

桁行5間、梁間6間、一重入母屋造、瓦葺、千鳥破風付の本堂です。文久年間（1861～64）の作です。もとは千葉県印旛郡本埜村にある天台宗寺院龍腹寺の地藏堂でした。不動堂本堂が東京大空襲によって焼失したため、これを移築し、昭和26年に竣工しました。本山成田山新勝寺の安政の本堂（現釈迦堂・国指定重要文化財）と同じ工匠（八木紋次郎）の作と考えられます。

＊詳しくは4・5頁の講演録参照。

石造燈明台 明治31年在銘 1基

富岡1-17-13 深川不動堂

（所有者 江東区）

境内の南東にあります。高さは839・4cm、約370cm四方の燈明台です。明治31年（1898）7月に竣工しました。設計者は佐立七次郎。内部は煉瓦構造で外壁に寄附者を刻んだ石板を貼っています。もとは上部に八角形の火袋がありましたが、関東大震災で倒れました。平成20年5月頃に境内西隣の深川公園に移設する予定です。

＊詳しくは4・5頁の講演録参照。

### 【無形文化財（工芸技術）】

簾製作

保持者 豊田勇

簾とは、細く割った竹、葎などを一定の間隔をおいて木綿糸などで編み連ねたものをいいます。昔から高温多湿という日本の気候風土に合わせて、様々な形で用いられてきました。日除けや通風に役立つ外掛簾、室内で間仕切りや装飾として使われる座敷御簾があり、海苔巻きやかまぼこ・ようかんなどの包装に使われる小物簾もその一つです。また、簾を建具の中に使った戸（夏障子）、衝立、屏風などのように簾を応用したものもあります。

簾製作の技術は、宮廷や神社仏閣で用いられる高級品としての御簾を製作する技術に発展する一方、実用品とし

ての簾を製作する技術が根

底にあつて受け継

がれ、江戸時代

に江戸に

おいても

簾専門の

職人が存

在し、その技術は全国に広まってい

たと考えられます。とくに江戸では、

自然素材の味わいをそのまま生かした

江戸簾が生み出され、今日まで生活用

品として欠かせないものになっていき

ました。以上の点で、簾製作の技術は、

本区にとつて重要な伝統工芸技術とい

えます。

保持者の豊田勇さんは、簾職人の家

に生まれ、3代目として50年以上にわ

たつて仕事を続けています。簾全般の

製作技術はもちろんのこと、芝居用簾

類の製作技術も継承して、高度な竹ミ

ガキや竹割りの技術を保持し、現代舞

台技術を支える技術者の一人として貴

重な存在ともなっています。昭和57年

に保持者として認定されています。

石工

保持者 新川昇

石工はノミなどを使用し、さまざま



竹割り

な種類の石に彫刻・文字を施す技術です。古くは石作・石切などと称され、12世紀には石材の選択・運搬などを担っていたといわれます。その後、石

造・石塔や建築材料などとして広まり、

その加工技術は築城にも生かされ、生

業として定着しました。江戸時代にな

ると、石材加工品の種類も多くなり、

技術も需要に応じて専門的なものへと

分化しました（石切・硯師・庭石屋な

ど）。さらに、寺社や民間信仰に結びつ

くと、石工の技術は広く一般化し、石

仏や寺社への奉納物、墓石など、庶民

の生活に深く浸透しました。道具も専

門化し、ノミだけをとり、作品の

輪郭を整えるためのハツリノミ、細部

を削るためのサキノミ、ツキノミなど、

多種類に及び、石仏の表情なども、よ

り詳細な表現が可能になりました。石

仏を浮き彫

りで製作す

る場合、石

の輪郭が欠

けないよう

に整形する

（これを「は

つる」とい

います）技

術や、表情

を彫る技術



などは、長年の経験と勘に加え、石の性質を知り尽くしていることが要求されます。

保持者の新川昇さんは、兵庫県の淡路島で6代続く石工の家に生まれ、戦後現在地（清澄）に住むようになりました。子供の頃から仕事を手伝い、技術を習得し、上京後、本格的に石工活動に入り、江東区や周辺地域の寺社などで、多くの作品を手がけました。なかでも、石仏彫刻を得意とします。寺社を多く抱える江東区にあつて、石工の技術は貴重といえ、昭和59年に技術保持者として認定されました。

#### 登録文化財

#### 【有形文化財（建造物）】

清洲橋

清澄1―中央区日本橋中洲 東京都

永代橋

永代1―中央区新川1 東京都

＊清洲橋・永代橋は平成19年6月18日に国指定重要文化財に指定されました。橋の解説は『下町文化』238号をご覧ください。

#### 深川不動堂本堂

富岡1―17―13 深川不動堂

＊平成19年度に区指定有形文化財に指定。

#### 【有形文化財（歴史資料）】

富賀岡八幡宮大幟 三井親和書

南砂7―14―18 富賀岡八幡宮

祭礼に使用された木綿製の幟。

縦968cm、横186cm。



5cmの大きなもので、上部が欠損しています。安永8年（1779）に三井親和が書き、砂村の氏子が奉納したものです。三井親和（1700―82）は細井広沢門下の書家で、深川に住んだことから「深川親和」と称されました。「親和染」という染め柄や幟旗が流し、『東都歳事記』や『江戸名所図会』などに親和作の幟旗が描かれています。都内で現存するものは本幟のみであり、貴重な文化財といえます。

#### 【無形文化財（工芸技術）】

木工（箱風呂）

保持者 和田重夫・和田輝男

木製の浴槽である箱風呂の製作には、水漏れをふせぐため、板材の接合加工に独特な技術が用いられます。「すりあわせ」と呼ばれ、船大工にもみられる技術であることなどから、造船技術から発展したものと考えられます。

江戸時代には、地下室（六蔵）の板囲いを作っており、



「六蔵大工」と呼ばれていました。近年では、主に個人宅の箱風呂や業務用の木槽が作られています。

#### 【史跡】

加舎白雄誕生の地

白河4―9、三好4―1―3付近

加舎白雄（1738―91）は江戸中期の俳人です。芭蕉以後、衰退期にあつた俳諧を再び隆盛させ、その功績から後世において俳諧中興の祖と評価されています。本名は吉春、号は昨鳥、白尾坊、露柱庵、鳴立庵、春秋庵など。元文3年（1738）8月25日に上田藩松平家の深川抱屋敷にて、藩士加舎吉享の子として生まれました。秋露庵鳥明に俳諧を学び、後に鳥明の師白井鳥醉に師事し、影響を受けます。

『加佐里那止』、『文車』の著書をもとに諸国をまわり俳諧を説き、日本橋に春秋庵を構えて後進の指導にあたりました。門人は4千人を数え、俳人として名を知られた者だけでも200人以上いました。作風は私意や技巧を捨象して、平明自然を主張し、繊細な感覚と清明な作品を数多く生みだしました。寛政3年（1791）に春秋庵で没し、南品川海晏寺に葬られました（享年54歳）。

#### 西館断水墓

亀戸3―10―8 長寿寺

墓地の東側にある西館孤清墓（区登

録文化財・史跡）の前にあります。

断水（1835―80、諱建哲）は天保6年に弘前藩津軽家の藩士高倉盛儀と津軽多膳娘の次男として生まれ、10歳で西館本家の養子となります。家督を継ぐと諸役を歴任し、次第に藩主承昭の信任を得て、慶応元年（1865）に家老職に就任しました。

徳川幕府が倒壊し、慶応4年に奥羽越列藩同盟が結成されると弘前藩もこれに加わりますが、京都出役西館孤清の活動により、藩主が官軍支持に方針を変えると、断水は藩主の意を受けて家中の説得にあたりました。その結果、弘前藩は新政府から奥羽触頭に任命され、箱館戦争の尖兵をつとめ、断水は藩兵を率いて転戦しました。

明治2年（1869）の版籍奉還後、断水は入れ札によつて弘前藩大参事に就任しますが、同4年に職を辞し、11年には妻子を引き連れて東京に寄寓しました。明治13年10月29日に没し、長寿寺に葬られました（享年46歳）。

#### 登録解除

#### 【有形文化財（建造物）】

石造鳥居 明治40年在銘（東砂天祖神社）

〔解除理由〕鳥居新造により遺失

#### 【有形文化財（歴史資料）】

燈籠（残欠） 明治16年在銘（深川不動堂）

〔解除理由〕境内整備により遺失

# 江東区の寺社建築

東京大学工学研究科  
建築学専攻准教授

藤井 恵介

東京、特に江東区は関東大震災と東京大空襲によって甚大な被害を受けました。その江東区に江戸時代の木造寺社建築があると聞き、まず驚きました。そして今回、ご縁があつて私が調査をいたしました。今日はその成果を中心にお話したいと思います。

## 1 深川不動堂本堂

深川不動堂の起源は、元禄16年（1703）に成田山新勝寺が本堂建設費用捻出のため富岡八幡宮で出開帳を行ったことに始まります。以降、出開帳は安政3年（1856）まで12回行われ、多くの参詣者を集めました。

明治に入り、神仏判然令（分離令）による廃仏毀釈運動の中で、永代寺が廃寺となり、その跡地に成田不動尊の御旅所を移設するよう深川浜十ヶ町の



深川不動堂本堂正面

講社が働きかけます。さらに永久堂宇の建設を東京府に嘆願し、明治11年（1878）に許可を得て、現在地に境内を設置する

ことになり

ました。同

14年に本堂

が落慶しま

したが、関

東大震災によって全焼し、再建されました。しかし、東京大空襲によって再び本堂は全焼してしまいました。

戦後、不動堂は本山である成田山新勝

寺の主導により復興事業に取り組みます

が、厳しい木材統制によって新築は認め

られず、移築という方法で本堂を再建す

る方針が採られました。そこで目を付け

られたのが千葉県印旛郡本埜村の龍腹寺

という天台宗寺院の地蔵堂です。龍腹寺

檀家との交渉の結果、昭和23年に譲渡契

約が結ばれました。そして翌年から移築

が始まり、26年に落慶しました。これが

現在の本堂です。

次に建築的な

特徴をみましょ

う。お寺の本堂

は僧侶が行事を行

う内陣と信者が

が詰める外陣に

わかれます。外



外陣の上部

陣の上をみると立派な梁がとんでいて装飾の木が組まれています（写真）。また、普通の建物の場合真ん中に柱を1本立てるのですが、外陣を広くとるために大きな梁を渡してその上に天井を載せています。つまり技術的な工夫でして、大工の見せ場の1つなのです。

次にお堂の最前にある向背ですが、

これは外からお堂の中がみえるように

したもので、ここに唐破風や手の込んだ彫刻が施されています。これは江戸

時代の特徴的な寺社建築の方法です。

これも見所の1つで、表側から見たただけでその建物の立派さを示すわけです。

すなわち、この本堂は江戸時代の寺社建築として正統なものといえます。

この本堂を不動堂に移築した理由ですが、『千葉新聞』昭和23年10月9日の記事によれば、龍腹寺地蔵堂と新勝寺の本堂（現釈迦堂・国指定重要文化財）は同じ工匠が建てた姉妹堂であるため

としています。新勝寺釈迦堂は上総国八木村（現流山市）の八木紋次郎とい

う工匠が建てたものです。一方の不動

堂本堂が本当に八木紋次郎の手による

ものなのかは棟札が残っていないので

断定はできません。そこで釈迦堂と不

動堂本堂とを比較して共通性があるか

みてみました。

まず、外観ですがプロポーションは

似ていますね（写真）。次に平面図をみると、ともに正方形であることがわかります（図1）。正面は柱が6本で桁行き5間です。釈迦堂の方が4mほ

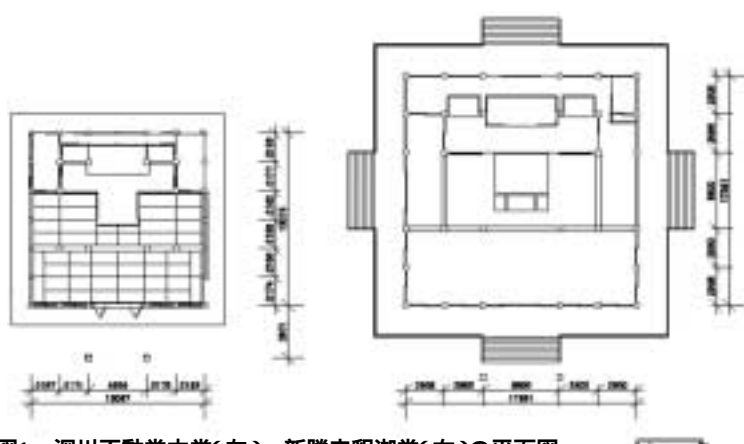


図1 深川不動堂本堂（左）・新勝寺釈迦堂（右）の平面図



移築直後の深川不動堂本堂



成田山新勝寺釈迦堂

（安政の本堂：国指定重要文化財）

ど大きいですね。柱はほぼ等間隔で、真ん中の柱間は1間分の2倍になっています。また、両堂とも外陣が2間、内陣が3間で仏間が張り出しているという空間構造も似ています。この構造自体は真言・天台宗寺院に典型的なものです。ただし、お寺は人が通るため真ん中の柱間を広めにとるのですが、このように2倍も取るのは極めて珍しいです。さらに、お堂がほぼ正方形であるのも実は大変珍しいのです。つまり2つのお堂の設計は非常によく似ているということになります。となると、不動堂本堂も八木紋次郎の手によるものと見て良いのだと思います。

それではもう少し細かな装飾の比較をしましょう。外陣の上の構造は基本的に同じで、大変近い仕事です。次に組み物を見ましょう。これは出組という組み方ですが、釈迦堂の方は大変立派で、不動堂の方はそうでもないですね(写真)。しかし、これは規模が違っただけで方法としては一緒です。

次に大きな虹梁に不思議な模様が刻



不動堂本堂の出組



釈迦堂の出組

まれています。このような模様は江戸時代の初めからつき始めます。それ以前はありません。この模様は若草がうねっているのですが、時代によって特徴があり、それは全国どこも同じように変わっていきます。釈迦堂と不動堂本堂のものは19世紀の特徴を典型的にみせています(写真)。



釈迦堂の虹梁模様



不動堂本堂の虹梁模様

事とは言えないのです。

鎌倉・室町時代のお寺といえますと、皆さん浄土宗・浄土真宗・日蓮宗・時宗といった鎌倉新仏教を思い浮かべるかもしれません。この時代、経済力があつたのは真言宗・天台宗なのです。ですから、中世のお寺をみますと、鎌倉新仏教のお堂はあまり立派ではありません。立派なものはみな真言宗・天台宗のお堂なのです。そしてその末裔が新勝寺釈迦堂と不動堂本堂ということになるのです。

## 2 石造燈明台 明治31年在銘

不動堂境内の南東にある高さ約8mほどの建物です。これは日清戦争の戦

勝を記念して明治28年に起工し、31年7月に竣工しました。この燈明台とほぼ同じものが新勝寺にもあります。

設計者は佐立七次郎という人物ですが、彼は工部大学校(現東京大学工学部)の第1期生で、東京駅を設計した辰野金吾や迎賓館を設計した片山東熊、また曾禰達蔵といった近代日本建築界の先駆者と同期にあたります。現存する佐立の作品は日本水準原点標庫と旧日本郵船株式会社小樽支店があります。

周囲には建立のために寄附した人々の名前が刻まれた石板が貼られており、市川団十郎・尾上菊五郎・市川左団次といった歌舞伎役者や魚河岸の人々など幅広い人々によって信仰されていたことがわかります。

中は煉瓦積みになっていて、本来は螺旋階段が付けられていたと思われれます。また、もともと上に八角形の火袋があつたのですが、関東大震災で倒れたようです。しかし、本体は非常にしっかりした造りになっていて大震災と空襲も乗り越えて今にいたるわけです。



石造塔明台

## 3 繁栄稻荷神社本殿

木場2丁目にある神社です。

宝暦7年(1757)に大丸が商売繁盛のために勧請した神社です。境内には



繁栄稻荷神社本殿

江戸時代の燈籠や鳥居などの古い文化財があります。その後、明治44年(1911)に大丸が撤退し、この神社は根津家(港区青山)へ移築されました。そして平成元年に大丸コアビルの新築に伴い現在地へ戻ってきたわけです。建物の特徴としては江戸時代後期の特徴をよく示したものだといえます。

このように江東区の古い木造寺社建築は大震災と空襲という2度の被災を移築という方法で乗り越えたわけですが、これは江東区の地域性というものを示しているのと同時に、建物が再生されるといいう木造建築の特質を示しています。建物が動くというのは実はあまり評判がよくないのですが、これはヨーロッパ的な考え方です。しかし、解体・再生がしやすい木造建築にとつて、移築という行為は重要な機能の一つなのです。

\*この記録は平成20年3月5日(水)に行われた講演会の要旨です。

# 「古池に蛙は飛びこまなかつた」

俳誌「古志」主宰 長谷川 耀

『古池に蛙は飛びこんだか』（花神社）という本を平成17年6月に出版しました。これは本にする前に、『俳句研究』という雑誌に1年間連載しました。そのとき、編集長に「この句は300年前に詠まれてからずっと誤解されてきたので、誤解を解くにはこれから300年かかります」と言ったのですが、3年も経たない内に多くの人に認められて、僕としてはたいへん嬉しく思っています。

今日は江東区芭蕉記念館にお招きいただいたわけですが、まさにここが古池の句の発祥の地、本家本元でして、この会場には地元の方がたくさんいらっしゃる。古池の句とは一体どういう句か、半信半疑かと思いますが、帰る頃には目から鱗が落ちているはずです。今日は「切れ」と「間」と「和」の3つの言葉をキーワードにお話したいと思います。

「切れ」というのは、「切れ間」という言葉があるように、物を切ることによって、物と物の間にすき間ができません。これが「間」ですね。つまり「切

れ」が「間」をつくるわけです。

「間」があることによって意見の違う人とも一緒に居られますね。つまり「和」が成り立ちます。「和」が成り立つには「間」が必ずいるわけです。そうすると「和」とは「切れ」によって成り立っていることになります。つまり、日本の文化の根本である「和」の問題は、実は「切れ」と非常に深い関わりがあるのです。

話の順番は、最初に古池の句と「切れ」の問題、その次に古池の句と「間」について、3つ目に古池の句と「和」の問題、という順でお話しします。最後に僕が古池の句をテーマに書いた「古池蛙」という狂言を皆さんから希望



を募って朗読していただきたいと思います。

最初の問題。まず、古池の句はどんな内容の句かということですが、今までは「古池に蛙が飛びこんで、水の音がした」と、全部現実の世界を詠んでいると解釈されてきました。しかし、この句は、「蛙が水に飛びこんで音がした。これを聞いて芭蕉が心の中に古池を思い浮かべた」と解釈するべきなのです。古池は心の中にあるわけですね。蛙が飛びこむ音は現実です。つまり現実の世界と心の世界を合わせている。違うものを合わせているということ、これは「取合せ」の句である、ということになります。この「古池や」「や」はとても重要で、「古池」と「蛙飛びこむ水の音」との間にはとても大きな「間」があることになります。

これには重大な証拠がありまして、芭蕉の弟子の各務支考（かがみしこう）が書いた『葛の松原』という本の中に、古池の句を詠んだ時の状況が書かれています。この記述から、芭蕉は芭蕉庵の中にいて、蛙が飛びこむ音は聞いたけれども、飛びこむところは見ていなかったことが分かるのです。つまり古池を見ていなかったのです。

それともう一つ、この記述からわかるのは、「古池や」が最初にできたので

はなく、「蛙飛びこむ水の音」が先にできたということ。言葉の順序ですね。「古池や」を最初に詠んだとするから「古池に蛙が飛びこんだ水の音」と解釈してしまう。ところがそうではなく、まず「蛙飛びこむ水の音」の句ができた。その音を聞いたことによって、「古池や」ができたわけです。

ここで大事なことは、芭蕉は目で見ただ、あるいは耳で聞いたということだけではなくて、心、つまり、想像力を働かせてこの句を詠んだということです。これがとても大事なのです。

そこから蕉風というのは心の世界だということがわかってきます。「古池や」の句は芭蕉の一番有名な句ですが、ただ有名なだけでなく、昔から「蕉風開眼の一句」といわれ、芭蕉が自分の俳句の道を初めて見付けた句とされています。蕉風というのは現実の中に心の世界が開かれる、その心の世界が蕉風なのです。

次に古池の句と「間」についてですが、「間」とは一体どういうものであるのか。実は「間」とは何かがあるのでなく、何も無い空間や時間のことなのです。そこが大事なのです。古池の句もこの「間」をきちんと活かして解釈する必要がありますね。「間」を活かすと、心の世界を伝えることができ

るわけです。古池の句は「間」を大事にして詠まれている句ですから、我々がそれを解釈する場合も「間」を大事にしながらか詠む必要があるのです。

次に古池の句と「和」の話に移ります。「和」という問題は、日本人にとつてとても大きな問題ですが、俳句でいうと、「和」は「取合せ」ということになります。「取合せ」とは違うもの同士を合わせることで、違うもの同士が合うのは「切れ」があるからで、「切れ」によって「間」が生まれ、この「間」が異質なもの同士を調和させる。これが「和」です。

しかし、「和」に対する大いなる誤解がありまして、最近、雑誌や本などではさかんに「和」を取り上げていますね。いわゆる「和の雰囲気」という意味で使われている「和」のことですが、実は「和」というのはもつと違うものなのです。それでは何が「和」なのかというと、和する、和える、和やか、みな「和」の字を使うし、平和の「和」でもある。和心と書くと「にぎこころ」と読んで、人と調和する心のことですね。つまり、「和」とは調和を表している言葉なのです。では、調和とは一体何かというと、違うもの同士が合うということなんです。これは俳句では違うもの同士を調和させる、つまり「取合せ」

になります。

我々日本人は色々な違うものを合わせることを昔からやっています。例えば、「八百万の神々」と言いますが、色々な神様がこの国に暮らしている。それがまさに、「和」の世界なのです。日本の場合には八百万の多神教ですが、外国には一神教の国もある。地球全体にはいろんな神様がいるわけですが、それをどうやって調和させるかというときに日本人が今まで何千年もやってきた八百万の文化は、とても良いモデルになっていくのではないかと思います。

また、古池の句に戻りますが、古池の句の「切れ」を大事にする、そこに「間」が生まれ、その「間」が「和」を成り立たせている。ということは、古池の句は単に俳句だけの問題ではなくて、日本人の考え方、あるいは世界の平和と言いますが、地球の問題を考えていく上でとても大事な句ということになるのではないかと思います。

それで、お約束どおり、狂言「古池蛙」を最後に朗読していただこうと思います。これは『国文学』という雑誌に発表し、すでに活字になっているものです。（「古池蛙」の朗読）

\*この記録は、昨年10月7日に芭蕉記念館で行われた講演会の要旨です。

## 平成20年度芭蕉記念館特別展

# 雲英文庫に見る芭蕉、蕨村、一茶と新しい領域

「幻の資料」特別出品も！

4月24日（木）～6月22日（日）

雲英文庫は、俳文学研究者の雲英末雄氏によつて集められた芭蕉と芭蕉を取り巻く俳人などの作品群です。掛軸や巻物をはじめ、短冊・俳書・俳諧一枚摺などの多岐に渡る俳諧資料からなり、学術的にも貴重な資料群です。

今回は、雲英文庫のコレクション98点を公開します。展示では俳諧の流れを示す資料として、山崎宗鑑を皮切りに、貞門から談林の俳人、そして元禄から蕨村・一茶の時代に至る当時の著名俳人の真蹟を集めた、迫力ある内容となっています。

さらに、雲英文庫とは別に、これまで写真にのみ確認されていた「幻の史料」、元禄4年（1691）9月9日付「去来あて芭蕉書簡」の原

物が75年ぶりに明らかとなり、所蔵者の御好意により、特別に出品されます。



特別出品の「去来あて芭蕉書簡」

この史料は芭蕉が『おくのほそ道』の旅からほぼ2年に及ぶ上方での漂泊生活を打ち切つて、帰東の予定がかたまりつつあった時期のもので、去来に内々で旅支度の用意を頼むなど、当時の芭蕉の動静を知る貴重なものです（『芭蕉全図譜』）。なお、本史料は5月25日（日）までの特別公開となりますので御注意ください。

また昨年好評だった、「俳諧一枚摺」のコーナーでは、今回新たに30余点を公開、句のほかにカット風の画が添えられており、デザイン的にも興味深い内容と言えます。（横浜文孝）

時間 9時30分～17時

休館日 第2・第4月曜日

料金 大人1000円・小中学生50円  
交通 都営地下鉄新宿線・大江戸線

「森下」駅 徒歩7分

問合せ ☎03(3631)1448

\*会期中、柿衛文庫発行の図録『雲英文庫に見る芭蕉・蕨村・一茶と新しい領域』（定価2000円）を窓口にて販売します。是非お求めください。

## —文化財揭示板—

「東京都優秀技能者」として認定

木工（襖・欄干・障子）

鈴木 延太郎さん

区登録無形文化財（工芸技術）保持者の鈴木延太郎さん（石島）が、昨年11月8日に表彰されました。ますますのご活躍をお祈りします。



工匠館の常設展示を替えました！

森下文化センター2階の工匠館（吉番館）・式番館の常設展示替えを平成20年3月に行いました。新たに、菓子器・釣竿などの「漆塗りの工芸品」（吉番館）、屏風・衝立・源氏襖などの「空間を仕切る工芸品」（式番館）、船釘などの「船をつくる技術」（式番館）を展示しました。是非ご覧下さい。



「船をつくる技術」

## 平成19年度寄贈資料リスト

19年度、文化財係に寄贈された資料は次の通りです。（敬称略）

「協力ありがとうございました。」

寄贈資料 寄贈者名（住所）

絵葉書（関東大震災）

武部和子（越中島）

レコード 江東区塩浜荘（塩浜）

第一期種痘済証 大森敏明（枝川）

二重廻し 高橋国男（大島）

たらい 加藤春代（亀戸）

古写真（東雲ゴルフ場） 鈴木三郎助（港区）

「奥の細道」切手セット 佐藤加吉（福島県）

古写真・絵葉書・卒業アルバム他 高木重治（南砂）

『明治両校落成記念帖』他 竹本照子（渋谷区）

古写真（洲崎消防署周辺） 八木信一（平塚市）

張板 添田栄助（亀戸）

書籍（『目でみる江戸時代』巻・式） 戸村牙（東雲）

座敷御簾 豊田勇（新大橋）

書籍（『鋳物師 六右衛門』） 下谷一廣（武蔵野市）

石造燈明台 明治31年在銘 1基 深川不動産（富岡）

## 新刊情報

『江東ふるさと歴史研究論文集』七号

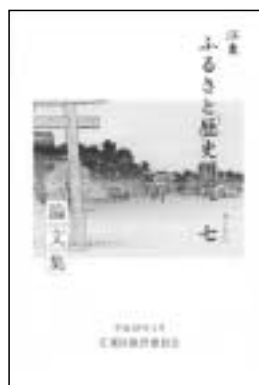
A4判 10頁 1000円

【所収論文】

青木一郎「深川の地蔵坊正元建立江戸六地蔵を訪ねて」

六地蔵を訪ねて

頒布場所 区役所6階 文化財係



## 江東外伝 見発見伝

「おばあちゃんの原宿」として毎月4のつく日は大変な賑わいをみせる巢鴨の地蔵通り。この通りの入り口、真性寺の江戸六地蔵の脇にひとつの石塔があります。

「おばあちゃんの原宿」  
巢鴨地蔵通りの石塔



台座に大きく「深川 佐賀講」と刻まれた石塔の正面には、「御府内八十八ヶ所ノ弘法大師ノ第三十三番札所 真性寺」とあります。この石塔は、明治43年（1910）5月に神田台所町（現千代田区神田明神付近）の石工「石熊」が彫ったものです。左側面にはいずれも佐賀町の人で、坂井伝兵衛・家崎福松・竹内林助・

田中稲太郎が施主として刻まれ、背面には佐賀町 藤田元治郎・大住町 吉田熊吉・材木町古市藤兵衛が発起人として刻まれています。大住町と材木町は現在の福住2丁目です。

江戸六地蔵の脇に、ここにもひとつ江東区とのゆかりを見つけました。（元文化財専門員 NPO法人としま遺跡調査会 小川祐司）

## 文化財の修復が終わりました！

平成18年度に登録文化財（有形文化財・歴史資料）になりました新大橋橋名板（新大橋3-1-15八名川小学校敷地内）の修復が終わりました。長い間風雨にさらさ

れ、だいぶ傷んでいました。錆や汚れのクリーニン

グ、不安定部分の補強、アクリル樹脂による防錆処理

を施しました。

